

# 「カレールライス」の教材としての価値

—— 人物像の分析を通して ——

佐々木 淳 志

## 一、はじめに

「カレールライス」は重松清による小学校教科書初の書き下ろし作品であり、光村図書平成十七年度版小学校国語教科書（六年上「創造」）の第一教材として掲載されている。重松清の主な作品には「ナイフ」や「エイジ」、「ピタミンF」などが上げられ、石原千秋氏はそれらについて以下のように評価している。

重松清はまた郊外の家族を書き続ける作家でもある。郊外に住む家族の夢と現実の狭間を書いている。あるいは、郊外に住む家族が隠し持っている毒を書いている。しかし、完全に崩壊した家族は書かない。もしそういってよければ、ほどよく壊れているのである。そこにはリアリティーがある。日本中が郊外化したいま、それは家

族の現実だといつてよいからだ。（注1）

石原の指摘からもわかるように、重松清の魅力は、現代の家族や子どもたちの抱える問題を小説の中で積極的に取り上げ、「家族の現実」をリアルに浮き彫りにしていることだと言える。「家族の現実」とは、生活スタイルの変化などに起因する、家族間の関係の変化だといえよう。それは、関係性の変化から来る過去の家族の崩壊だと言い換えられる。

そのような重松清の作品が小学校国語教科書に掲載されるのはこれが初めてである。今までの小学校教材には「家族の現実」を描いたものはなかったと言つてよい。その点で新しいタイプの作品である。では、そのような教材が小学校の現場ではどのように指導されているのか。また、この教材の新しさは十分に生かされているのか。以上の考察を通して、重松作品を子どもたちに教える価値を明らかにしたい。

## 二、教師用指導書の記述とその問題点

「カレライス」は、主要な登場人物である「僕」の一人称の語りを通してある家族を描いた作品である。教師用指導書では、あらずじは以下のようにまとめられている。

思春期の入り口にある主人公「ぼく」は、父親とささやかな衝突の後、これまでと違ってすぐに仲直りできない。自分の気持ちをうまくコントロールできず、切り出すタイミングもつかめない。そんな自分へのいらだちや、大人への不満、愛情が入り混じる自分の感情をコントロールできないのだ。

一方父親は息子が思春期にさしかかっていることに気付かず、今もカレリーの「甘口」を好んだ幼時と同様に考えている。

ある晩、風邪気味の父を氣遣う「ぼく」が、「中辛」カレリーを作り、父がそれを喜ぶことで、二人はほんの少し近づいたようだ。(注2)

また、主題は次のように書かれている。

子ども扱いする父親に腹を立てていた「ぼく」が、風邪をひいた父親のために「中辛」カレリーを作ることによって、少し成長した自分を知らせることができ、自分もすつきりして仲直りできた話。(注3)

父親との仲たがいをきっかけに、子ども扱いする父、

父のみかたをする母への不満、うまく表現することができない自分自身への苛立ちをつのらせていた「ぼく」が、風邪をひいた父と二人で「中辛」カレリーを作ることで、少し成長した自分を認めさせ、心を落ち着かせる話。

(注4)

以上の記述から、指導書では思春期の入り口にあり、気持ちのコントロールができない子どもっぽい「僕」が、父親とカレライスを作るといふ出来事を通じて心の通わせ方を知り、少し大人へ成長する「僕の成長物語」としてとらえていると言えらる。また、教師用指導書には、「教材選定の理由」として「周囲の人間とのかかわりの中で言葉にできないもやもやした気持ちを感じているという点でも、物語に自分を重ね合わせやすいに違いない」(注5)と記されている。このことから、児童が「僕」に自分を重ねあわせ、「僕」と同化することを通して成長するような読みをすることを期待していると考えられる。

このような教師用指導書の捉え方にも一理あり、「カレライス」という作品の教材としての価値だということができ。しかし、この「僕」中心の教師用指導書の捉え方では、あえてこの重松清の作品を教材化して指導する必然性が薄いように感じられる。前述したように、重松清は「家庭の現実」をテーマにした作品を多く書いている。それらは現代の家庭の抱える問題を浮き彫りにしている点で特徴的であり、作者

の個性であると言える。そこから、重松作品を教材として扱う場合、指導の中で現代の家庭の姿を浮き彫りにさせることも重要であると言える。そうすることで重松作品を教材として扱う価値が生まれる。教師用指導書の捉え方では、重松作品の特徴である「家族の現実」の姿を浮き彫りにするには不十分であると感じる。

では、「家族の現実」の姿を浮き彫りにし、重松作品の個性を生かした指導のためにはどうしたらよいのだろうか。それには「僕」にとらわれず、父親や母親も含めた人物像を明らかにすることが有効である。そして、その人物同士がどんな関係を結んでいるかを見ることが重要である。そこにこそ現代の家庭像と言えるものが見えてくるはずである。そこで、各人物像を読み取ることを通じて、重松の描こうとした家庭像を明らかにし、「カレライス」の教材としての価値を明らかにしたい。

### 三、各場面における登場人物像

ここでは、各場面における「僕」と「父親」を見ることで、各人物像を明らかにしたい。なお、場面分けは教師用指導書ののつとり、全七場面とする。また、母親は登場場面が少なく、書置き等での関わりが主であるので、別に扱う。

第一場面は「僕」の「僕は悪くない」という言葉から始まる。第二段落では「先にあやまるのはお父さんのほうだ。」とも言っている。「僕」が謝らない理由は第三段落で明かされる。

確かに一日三十分の約束を破って、夕食が終わった後もゲームをしていたのは、よくなかった。だけど、セーブもさせないで、いきなりゲーム機のコードをぬいて電源を切っちゃうのは、いくらなんでもひどいじゃないか。

(傍線引用者)

傍線を付した所からわかるように、「僕」が、父親がいきなり電源を切ったことに対してやりすぎだと感じ、それに対して不満を持っていることがわかる。父が対等の扱いをせず、子ども扱いしていることに対する不満である。これはいかに子どもらしい不満であり、「あやまる気はない」と意地を張るところにも子どもらしさを感じられる。しかし、自分が約束を破ったことは悪いことだ、と自覚していることも読み取れる。自分の悪いところを自覚し、父の対応を分析していることから、「僕」はいかにも幼い思考しかできない子どもとして描かれているわけではなく、大人っぽい考え方もできるようになりつつある子どもだと読むことができるだろう。

対して父親は、母親に「ひろしはまだすねてるのか。」と聞いたり、落ち込んだりする。「すねる」は本来、「自分の思うとおりにならないため、ぐずぐずと逆らう態度をとる。」

〔大辞林 第三版〕」ことである。つまり、父親は「僕」が自分の悪いところを自覚せず、自分の思うとおりにならないことにだだをこねていると捉えているのである。「僕」が何に對して不満を持っているのか理解しておらず、また、わがままともしていない。

第二場面は「お父さんウィーク」初日の夕食の場面である。そこで、父親は先手を打って謝る。「僕」の最初の予定では「僕もあやまれば仲直り完了」だったが、「僕」はだまっていたままであった。何故「僕」はだまっていたのだろうか。父親の謝罪の内容を見てみると、

「この前、いきなりコードぬいちゃって、悪かったなあ。」  
となつてゐる。これは「僕」が求める「対等の扱いをせず、子ども扱ひしたこと」に對する謝罪ではない。そのため、「僕」は素直に謝って仲直り完了といかなかつたのだろう。また、父親の「でもな、一日三十分の約束を守らなかつたのはもつと悪いよな。」という言葉に對して「分かつてる、それくらい。でも、分かつてることを言われるのがいぢばいいやなんだつてことを、お父さんは分かつてない。」と感じてゐる。以上から、ここでも「僕」は意地を張る子どもらしさを残しつつ、父親を分析してゐる。

父親は第二場面でも「僕」とは反對に「僕」が何に不満を對しているのか分からず、また、深く考えることもしない。

小さい子どもに對するような姿勢で「僕」に接している。甘つたるい「特製カレー」と同様に、僕を子どもとして扱つてゐる。

第三場面では、「僕」は「もう仲直りしちやおうかな」と思うが、またしかられそうになつたからと思われるのが嫌だと感じてゐる。いかにも子どもっぽいが、そこには「子ども扱いされたくない」という気持ちが現れてゐる。しかし、「自分でも困つてる。なんでだろう、と思つてる。今までならあつさりごめんなさいが言えたのに。もつと素直に話せてたのに。特製カレーだつて、三年生のころまではすぐおひしかつたのに」というように、そんな自分自身の変化に戸惑つており、大人という自覚はまだないようである。ただ、父親の体調に気遣いをみせるなど、父親への反発の気持ちは消えてゐると読める。

一方、父親はまだ「僕」が「すねて」いると思つており、「もうしもやし、ひろしくうん、きこえてますかあ。」とふざけて話しかけたり、「いいかげんにしろ。」とにらんだりしてゐる。いかにも子どもに對する接し方である。ここでも「僕」の気持ちを理解できていない父親として描かれてゐる。

第四場面では、「僕」を子ども扱いし、火を使わせてくれない父親が「僕」の朝食を作つておいてくれる。そんな父親

に対し、「僕」は不満である。しかし、その不満は「朝は時間がないんだから」「ぼくはもう作れるのに」と、子ども扱いはされることに對する不満だけでなく、父親への氣遣いも含まれている。それは、不満に思うだけでなく、父親の氣遣いに対して嬉しさを感じていることからわかる。家族の自分への氣遣いに氣が付いているということである。単なる「子どもらしい子ども」であれば、自己中心的な考え方に陥りがちで、家族の自分への氣遣いには氣付けないだろう。ここでも、「僕」の大人になりかけている状態を表していると言えよう。

第五場面は学校の場面である。「僕」は素直に謝る練習をする。「うげえ、そんなの言うのってかっこ悪いよ。」と感じてもいる。「素直に謝るのは子どもみたいでいやだ」という氣持ちがあるのだろう。この二面性は、「僕」の半分子ども、半分大人の状態を表しているようである。

第六場面はお父さんウィーク三日目の夕方である。父親は体調を崩し、会社を早退する。「晩ご飯、今夜は弁当だな。」と、「僕」に作らせるという発想はないところから、まだ「僕」を子ども扱っている。しかし、「ぼく、作れるから」という言葉や、「僕」が中辛を選ぶことから、「僕」の成長に氣付く。一方「僕」はそんな父親にうんざりしたといいなが

ら、「こっちまでうれしく」なってくる。これは、父親に自分の成長を伝えることができ、氣持ちのずれを埋めることができた嬉しさであろう。

第七場面では父親は終始上機嫌である。「僕」の作ったカレーはしっかり煮込んであり、父親のカレーを超えている。父親はある面で子どもに抜かれた嬉しさを感じていたのではないだろうか。また、父親と「僕」は「今度は別の料理も二人で作ろうか。」という新しい約束をする。これは、今までの「ゲームは一日三十分」という、子どもに對する規制をかける約束ではなく、大人同士の約束と見ることが出来る。父親は「僕」の成長を認め、対等に扱っている。そんな父親に對して、「僕」は「僕たちの特製カレーはピリッと辛くて、でもほんのり甘かった。」と感じている。ピリッと辛い大人の味のカレーと一緒に食べながら、「僕」は大人として扱ってもらえる満足感を味わっていたのだろう。

各場面での「僕」と父親の氣持ちの変化を簡単にまとめた物が表1である。ここまで見てきたように、「僕」の人物像は終止一貫して、ただの子どもっぽい子どもではなく、大人っぽい考え方が出来るようになっていく。「半分大人、半分子ども」と描かれている。父親と対等な立場で仲直りすることを望み、父への氣遣いも出来る。そんな自分の大人への成長

を認めてもらえないもどかしさを感じている。素直に言えない子どもらしさが残っていたり、自分の内面の変化に戸惑っていたりする面もあるけれど、大人としての考え方が出来るようになりつつあると読み取れる。

一方父親は「僕」をいつまでも子ども扱いし、気持ちを分かってあげられない大人として書かれている。母親は普段「僕」と一緒に食事をし、「僕」が中辛カレーを食べていることを知っている。反対に父親は仕事が忙しく、家族と普段あまりコミュニケーションがとれないことから、家庭に目が行き届かない。そのため子どもの成長に気付くことができず、また、気付こうともしていない。しかし、子どもと仲直りできないことをさみしく思ったり、子どもに気を遣ったりもしている。これは、「僕」という一人称から見た父親像であり、そのため父親の側面だけを切り取っているためそう見えると考えることも出来るが、今まで教科書に採択されていた作品の父親像とは違い、父親としての厳格さに欠けている。子どもと父親との境界線が近く、友達のような感覚で子どもと接しているが、コミュニケーション不足から家族の成長や気持ちに気付けない、いわば、現代の父親ミとして描かれている。そんな父親が、「お父さんウィーク」に起きた息子とのカレールイス作りという事件を通して息子の成長を知ること

で、父親として成長する姿が描かれている。

以上のように、「僕」と父親の人物像を捉えてこの作品を

場面	「僕」	父親
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>子ども扱いされることに不満</li> <li>大人びた視点で物事を見つつある</li> <li>子ども扱いされることに不満</li> <li>↓ 仲直りできない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「僕」が「すねている」と思っている</li> <li>「僕」を子ども扱い</li> <li>下手で甘ったるいカレー</li> <li>子ども扱いした謝罪</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもも扱いたくない</li> <li>「子どもも扱いたくない」</li> <li>子どもも扱いたくない</li> <li>お父さんに対する怒りは消え、自分の変化にとまどっている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの心情を理解しようと思わず対応</li> <li>「僕」がすねていると思っっている</li> <li>「僕」を子ども扱い</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>父への氣遣いを見せる</li> <li>家族が自分を思ってくれていることに気付いている</li> <li>自己中心な子どもでなく、大人らしい考え方がきつつある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「僕」に仲直りできないことがさみしいと感じている</li> <li>従来の厳格な父親像ではない、「現代の父親」像</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>素直に謝るのは子どもみたいでかっこ悪い</li> <li>半分子ども、半分大人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「僕」に食事を作らせる発想がない</li> <li>「僕」を子ども扱い</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>こつこつまでうれしくなってきた</li> <li>父親との気持ちのズレが埋まった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの成長に気付く</li> <li>父親の考え方に変化</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>大人同士としての約束（規制をかけた約束）</li> <li>ピリッと辛くて、ちよっぴり甘かったカレー</li> <li>大人として扱ってもらえることへの満足感</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもに同等に接する</li> </ul>
7		

表1 各場面での「僕」と父親の気持ちの変化

捉えた場合、児童に「僕」と同化して読むことだけを求めるのでは不十分だということになるだろう。この作品の中では、「僕」よりも父親の成長の方が大きい。この作品は、「僕」の目を通して、現代の家族相互の関わりと変化を描き出ししていると考える方が良いのではないだろうか。

#### 四、新しい母親と家族の関係

今までの国語教科書に採択された作品内に出てくる母親は、多くの場合専業主婦であり、家庭を切り盛りする役割であった。それはある意味で古来の日本の母親の役割として広く認知されているものである。しかし、この「カレライス」に出てくる母親は、そのような母親像とは異なっている。「カレライス」の家庭は共働きであり、母親も仕事を持っている。パートなどではなく、フルタイムで、ある程度責任のある立場で働いていることが本文から読み取れる。父親と「僕」はそれに対して不満や違和感を持つことなく、逆に家庭の切り盛りの点で母親が仕事を続けるサポートをしている。つまり、この家庭は「女性が家庭よりも仕事を優先することを許す家庭」であり、従来の「母の役割」にこだわらない家庭であると言えるだろう。しかし、この母親は「母の役割」を放棄し、子どもの成長に気付けない母親としては描かれていない。母親は「僕」が中辛カレーを食べていることを

知っている。父親とは違い、常に子どもとべったりしているわけではないけれど、子どもの成長を知っている。その点で「僕」も母親が仕事を持つことに納得していると考えられる。このように、結婚し、子どもが生まれてからも夫婦共に仕事を続ける共働き家庭は現代では増えている。むしろ、祖母と同居し、母は専業主婦といった「日本風」の家庭の方が少なくなってきたと言っても良いだろう。このようなことから、「カレライス」は極めて現代的な家庭を描いた作品であり、その中に潜む問題を浮き彫りにしていると言える。

#### 五、教材の持つ価値

この作品を「現代の家庭の持つ問題を描いた作品」と捉えるならば、どんな問題が描かれていると言えるのだろうか。状況としては「核家族化の進行」と、「両親共にフルタイムの仕事を持つ共働き家庭」が挙げられる。そのため、家族が一緒に過ごす時間が減り、コミュニケーションがうまく取れず、家族が分裂しかねない危機を抱えていると捉えることができる。実際に教室にいる児童の家庭も、この「カレライス」に出ているような家族が大半を占めている。その点では、「カレライス」で描かれている世界は、児童、保護者にとってより身近だといえる。そのため、他の作品よりも強い実

感を持ちながら読みすすめることができるに違いない。

このように、「カレライス」は社会変化の中で変わっていく家庭のあり方を容認し、子どもたちに現代の家庭のありかたを見つめなおさせようとしている点で、今までにないタイプの作品であり、大変斬新であり、教材として取り入れる価値のある作品だといえる。

## 注

- (1) 石原千秋「小説入門のための高校入試国語」(二〇〇二年・NHK ブックス)
- (2) 小学校国語学習指導書六(上) 創造(二〇〇五年 光村図書)
- (3) 注2と同
- (4) 注2と同
- (5) 注2と同